

論文の和文要旨

論文題目	The Effects of Corpus Use on Error Correction and Error Identification in L2 Writing コーパス使用が L2 ライティングにおける誤り修正と誤り特定に及ぼす効果
氏名	佐竹 由帆

第二言語ライティングにおける誤りの修正や特定にコーパスを使用する効果については、いまだに十分に研究がなされていない。本研究の目的は、データ駆動型学習 (DDL) が誤りの修正や特定に及ぼす効果を検証し、コーパス言語学の情報がどのように第二言語ライティング学習に影響するか探求することである。

本研究の第一の目的は、第二言語ライティングにおける誤りの修正や特定に DDL が効果的な誤りの種類をつきとめ、教室における第二言語教育・学習の利益を最大化することである。

本研究のもう一つの目的は、教師によるフィードバックとピア・フィードバックが、コーパスを使用して行う誤りの修正に及ぼす効果を比較することである。教師の指導効果を高め学習者の自律性を養成するために、コーパスを使用すれば教師によるフィードバックなしで学習者が特定・修正できる誤りの種類と、コーパスを使用してもその特定・修正に教師によるフィードバックが必要な誤りの種類を調査した。

著者の仮説は、コーパスで対象語句の用例を数多く読むと学習者は正しいパターンを用例から帰納できるので、第二言語ライティングにおける誤りを特定・修正するのに役立つというものである。もう一つの仮説は、異なる種類のフィードバックは、コーパスを使用する誤りの特定・修正に対する効果が異なるということである。これらの仮説を確認するために、著者は時間制限のあるエッセイタスクを使用した。研究参加者はコーパスや辞書などの参照資料にアクセスせず、25分で著者に与えられたトピックに基づきエッセイを書いた。次

に参加者は自分の誤りに対し、教師によるフィードバックかピア・フィードバックを与えられた。与えられたフィードバックに基づいて、参加者は参照資料にアクセスし、あるいは無参照で誤りを修正した。著者は参加者のエッセイを集めて学習者コーパスを構築し、品詞、誤りの種類、フィードバックの種類などの情報を持つエラータグを付与した。最後に著者はエラータグに基づき誤りがどのように修正されたか分析した。

本研究には、参照資料とフィードバックという二つの独立変数がある。参照資料の変数の水準は、コーパス、辞書、資料無参照の三つがある。著者は参加者の誤り修正について、コーパス使用、辞書使用、資料無参照の場合を比較した。フィードバックの変数の水準も三つで、教師によるフィードバック、ピア・フィードバック、フィードバックなしである。参加者の誤り修正は、上記フィードバックのいずれかに基づく。

主な結果の要約は次の通りである。第一に、コーパスの使用は第二言語ライティングにおいて誤りを正確に修正するのに寄与した。コーパス使用の利点是对象語句そのものに容易にアクセスできることと共起語の頻度情報であり、正しく検索し高頻度の対象語句にアクセスできた場合、学習者は正確に誤りを修正できる傾向が見られた。この強みは特に参加者が単語の脱落の誤りを修正するのに役立ち、参加者は辞書使用や参照資料なしの場合と比較して、コーパスを使用した場合に脱落の誤りを最も多く最も正確に修正することができた。学習者が修正した誤りの多くが語彙的な誤りではなく、コロケーションや形に関する誤りが多かったため、上記のコーパスの利点が誤り修正に生かされる結果になったと考えられる。修正件数の多い誤りでコーパスの使用が正しい修正に貢献したのは、大文字と小文字の選択の誤り、名詞の単複に関する誤り、品詞選択の誤り、主語・動詞の人称・数の不一致の誤り、語順の誤り、余剰の誤りである。特に語順の誤りと大文字と小文字の選択の誤りを、正しく修正できた。一方、動詞の態の誤りに対しては、コーパスの使用は正しい修正への貢献が比較的低かった。誤りの種類によるが、綴り字の誤りや動詞の時制の誤りのように、フィードバックで指摘された単語が誤り修正の候補を見つける上で有効な検索語にならない誤りについては、コーパスで検索しても適切な修正候補にヒットしないので正しく修正できない傾向が見られた。このように、誤りの種類により直せる程度に差が生じた。直せる程度は参照資料によっても違いがあり、例えば語彙的誤りについては、コーパスは何も参照しない場合よりは正確な修正に寄与したが、辞書を参照する方が意味情報が役立ち、より正確な修正に結びついた。直しやすい誤りを修正する時はどの参照資料を使用しても正しく修正できる傾向があるが、直すのが難しい誤りの場合は適切な参照資料の選択が正しく修正できる率を高めるため、教員の指導が必要であると言える。また、

参照資料の選択については、授業が進むにつれて学習者は脱落の誤りについてはコーパスを、語彙的な誤りについては辞書を使用して直すようになっており、資料を参照して誤りを修正することに慣れるにつれて、誤りの種類に合わせて適切な参考資料を選択することができるようになったと考えられる。

主な研究結果として二番目に挙げられるのは、コーパス使用による誤り修正は、教師によるフィードバックに基づく方がピア・フィードバックやフィードバックなしの場合より正確かつより多い修正を促進したことである。このことは、コーパス使用により修正可能な誤りを著者が指摘する傾向があったことによるものと思われる。教師によるフィードバックとコーパス使用の組み合わせは、脱落の誤りや主語・動詞の人称・数の不一致の誤りの修正に特に有効だった。ピア・フィードバックの短所は正しい表現を誤りとして指摘する誤指摘が全指摘の四分の一以上で非常に多いことである。誤指摘は、学生が正しい表現を誤って修正したり、修正件数が抑制されたりする悪影響をもたらす。誤指摘を防ぐためには名詞の単複に関する誤りのような、正しく指摘することが容易な誤りにしぼって学習者に指摘させるなどの工夫が必要だろう。異なるフィードバックは誤り修正に及ぼす効果が異なるため、効率的な誤り修正には誤りの種類に合った適切なフィードバックの選択が必要であり、教師はこの点について指導する必要がある。

三番目の主な研究結果として、コーパス使用が脱落・余剰のようなコロケーションの誤りや、数の誤り・不一致の誤りのような形式的な誤りの特定に特に役立ったことが挙げられる。その理由は、学習者が学習対象語句の用例に基づいて、帰納推論を行うことができたためだろう。誤りの修正の場合と同様に、誤りの特定におけるコーパス使用の利点は、学習対象語句への容易なアクセスと共起語の頻度情報であった。また、学習者のコーパス使用法には誤り修正の場合とは違いが見られた。誤り修正の場合には正しい修正候補を見つけるために用例を吟味する必要があるが、誤り特定の場合には対象語句の用例がコーパスに出現しない、あるいは極めて用例が少ないことを確認できれば誤りと特定できる。ゆえに誤り特定は誤り修正とは違う種類のタスクであり、ピア・フィードバックによる誤り特定を正確な誤り修正につなげるには、違いを考慮に入れた指導が必要であると考えられる。

以上の結果から、コーパス使用の効果を最大限に生かすためには、学習者が集中すべき誤りの種類と、限りある時間の中で特定し修正する誤りの数について、教師は十分な指導を行う必要があると言える。教師は授業の目的や誤りの種類に合わせて適切なフィードバックを使用すべきであり、それぞれのフィードバックにあった適切な誤りの種類について学習者に指導する必要がある。学習者が誤りをピア・フィードバックに基づいて修正する場合やフィードバック

なしで修正する場合には、これらのフィードバックは教師によるフィードバックに基づくより不正確な修正になりやすいので、適切な誤りの種類をより一層考慮して指導する必要がある。教室での第二言語ライティングにおいてコーパスが正確な誤りの修正を促進するためには、教師はフィードバックや誤りの種類、学習者の言語能力、学習タスクの種類など様々な要因を考慮して、DDLが第二言語学習における正確さを促進し、教室における第二言語教育の実用的な選択肢になるよう努める必要がある。DDLの導入を成功させるためには適切な授業計画が必要であり、学習者の第二言語の能力があまり高くなくコーパスの用例を解釈するのが難しい場合には、学習対象言語と母語とのパラレルコーパスを使用したり、検索すべき語を指導したりするなどの工夫が必要になるだろう。また、本研究は誤りを指摘するフィードバックに基づき修正のためにコーパスを参照することが対象語句の正確な修正に寄与することを示したが、先行研究の結果（誤りを指摘するフィードバックは、学習者による修正を経ない場合対象語句の学習に寄与しない）を考え合わせると、フィードバックが対象語句の効果的な学習を促進するためには学習者による誤りの修正が必要であると考えられるため、この修正タスクをいかに行うかに対象語句の学習効果はかかっていると言える。ゆえに本研究が提示した、コーパスを使用して修正タスクを効果的に行うための適切な方法は、語彙学習効果の向上に寄与する発見であると総括できるだろう。

本研究におけるより広い学際的観点からの長所として、第二言語習得(SLA)及び英語教育(ELT)分野において、コーパス使用がどのような貢献をなしているかについて、研究結果から提示できたことがあげられる。第二言語教育の教室におけるDDLの普及と、コーパス言語学のSLA及びELTへの応用に貢献すると考えられるだろう。

本研究で明らかにできなかったのは、コーパス使用の長期的効果（新たに書いた作文において誤りが減少するか）、ピア・フィードバックに基づいてコーパスを参照することが誤りの修正に及ぼす効果、学習者の言語能力が修正フィードバックの効果に及ぼす影響である。これらの点についてはさらなる研究が必要である。特に学習者の言語能力の影響については、日本人英語学習者の約8割がヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: CEFR）において初級のA2レベル以下であることを考えると、英語力が低い学生のDDL実践についてより多くの実証的研究が必要だろう。

結論として、本研究はDDLを第二言語教育の教室に導入する上での実用的な提案を行い、理論的側面においてはSLAとELTの分野におけるコーパス言語学の応用の促進に貢献した点で有意義であると言える。